－所蔵作品紹介－

建畠　覚造　TATEHATA Kakuzō

ＣＬＯＵＤ―36

作品データはこちら

建畠覚造は戦後日本の彫刻界をリードしてきたひとり。官展の彫刻家・建畠大夢（たいむ）の長男として東京に生まれ、東京美術学校彫刻科塑造部に学び、1941年卒業。戦中から文展などに人物彫刻を発表したが、戦後は晨星（しんせい）会結成（1947）と行動展彫刻部創立（1950）を行って新しい彫刻を目指す運動の地盤を作りつつ、手探りで抽象彫刻の世界へ進んで行った。1953年から55年のパリ滞在の後、セメントや鉄、樹脂など都会の生活に密着した素材をいち早く彫刻に取り入れ、その後は有機的な構成から集合の原理による造形へ向かい、さらにポップ感覚あふれる記号的表現、そして純粋な運動表現など、自在に作風を展開してきた。しかしその変貌には、彫刻の本質と現代という時代性を見据えて展開されるしなやかな造形思考が一貫してある。

そのなかに合板を素材にした作品群がある。もともと大きな彫刻のためのマケット（模型）制作に使い始めた合板だったが、やがて建畠は規格化された板面の「ドライな貌」と「本来見せてはならない筈の側面に異常に美しく積算されている層貌」との二律背反に惹かれ、1970年代末より合板の積層と切る・削るで作る〈CLOUD〉と〈LANDSCAPE〉シリーズを展開させたのである。この作品もそのひとつで、同じ合板の積層から直方体と雲（CLOUD）状の形が作り出されている。波が伝わるようなリズミカルな色の繰り返しは、板の断面と表面が示す色の違いによる。この造形に貫かれているのは単一性と多様性・規格性と偶然性・無機的と有機的といった対（つい）の原理であり、このたったひとつの原理から素材と表現の関係の奥深さとゆたかさをかいま見せてくれるのが作品の大きな魅力ではないだろうか。またシリーズの一区切りにも位置しており、ここに示された波状の運動が、次に建畠が取り組む課題になっていった。

※引用は建畠覚造『彫刻』（緑地社、1982）より。

「北海道立旭川美術館コレクション選集1982-1997」（1998年３月発行）より